

日本語讀本 卷七



目 録

第一	國 旗
第二	雲の峯
第三	萬壽(まんじゆ)の姫(ひめ)
第四	乃木大將の幼年時代
第五	水兵の母
第六	パナマ運河
第七	馬鈴薯王
第八	廣瀬中佐(ひろせちゆうさ)
第九	神 風
第十	燈臺守のむすめ
第十一	参宮だより
第十二	トマス、エヂソン
第十三	鐵工場
第十四	豊田佐吉(とよたさきち)
第十五	ブラジルにおける日本人
第十六	害虫と盆蟲
第十七	千早城
第十八	和 歌
第十九	木下藤吉朗
第二十	雪の夜
第二十一	心と心
第二十二	人を招く手紙
第二十三	修學旅行日記

# 日本語讀本 卷七

## 第一 國旗

今日一つの國家をなして居るもので、國旗が制

定せられて居ない所は無い。國旗は實に國家

を代表するしるしであつて、其の徽章(きししよう)や色彩(しきさい)に

は、それぞれ深い意味がある。



ブラジルの国旗は、緑色の地の中央部に黄色の菱形があつて、其の真中に藍色の地球をゑがき、

これを巻く白い帯に、Ordeme Progresso、(秩序  
(ちつじよ)と進

(新漢字 旗 制 定 無 帯)

(4・5ページ ぬけている)

(005.jpg)

を表はすもので、永久に變化することはないが、  
藍地の中の星は、常に州の數と一致せしめるこ  
とになつて居る。現今は、星の數が四十八箇で  
ある。

藍・白・赤の三色で、縦(たて)に染分けたものは、フランス  
の国旗である。此の三色は、自由・平等(びようどう)・博愛を表  
はすものといはれて居る。

ドイツ国旗は、赤地の中央に白の圓があり、其  
の中に黒のかぎ十字がゑがいてある。かぎ十  
字は太陽をかたどつたものだといふ。

イタリヤの國旗は、緑・白・赤の三色を縦に染分け、中央の白地の中に、王家の紋（もん）が表はされて居る。

これはイタリヤ中興の王エンマヌエルが、國土

統一（とういつ）の時、其の・家の紋章の色である白と赤とに、

統一の成功を祈る希望の色として緑を加へ、更

に王家の紋章を配したものである。

支那の國旗は、赤地の上の一隅を青にし、其の中

央に十二の後光をつけた白い日の形を染抜い

たものである。此の赤・青・白の三色も、自由・平等・

博愛の意味を表はして居るのだといふ。

（新漢字 永久 致現 色由 博愛 圓陽 王家  
興 祈 更）

(006.jpg)

近頃新しく興った満洲國の國旗は、地を黄色と

し、其の左肩（かた）の所に、紅（くれなゐ）・青・白・黒の四色  
を配したも

のである。青は東方、紅は南方、白は西方、黒は北

方、黄は中央を意味し、中央政府の政治が全國に行きとゞいて、國がよく治ることを示したものである。

日本の国旗は、白地に赤の日の丸を忍がいたも

ので、其の徽章や色彩は單純であるが、いかにも

けだかい所があり、よく「日本」といふ名にもかな

ひ、國が益榮（ますますさか）えて行くことはちようど朝日の上るようだといふことを思はしめる。又白地は、

國民の潔白（けつぱく）な性質を示し、日の丸は、もゆるが如き愛國の誠（まこと）を表はすものともいへよう。

かくの如く、各國の国旗は、或は其の建國の歴史

を暗示し、或は其の國民の理想（りそう）・信仰を表はすものであるから、國民のこれに対する尊敬は、すな

はち其の國家に對する忠愛の情の現れである。

だから、我々は自國の国旗を尊重すると同時に、

諸外國の国旗に對しても、常に敬意を表しをしなけ

ればならぬ。

(新漢字 興 南 示 建 歴 史 暗 示 仰 忠 情  
現 重)

(007.jpg)

第二 雲の峯(みね)

湧(わ)いて生まれた雲の峯、

林の上の太郎雲、

島(はたけ)の上の次郎雲、

三郎(さぶろう)雲はまだ低い。

低い雲から雲が湧く。

眞夏、明かるい青空に、

湧いて湧いて重なって、

だんだん高い雲の峯。

突立(つつた)ち上った太郎雲、

それを見上げた次郎雲、

三郎雲も負けないで、

重なり上る雲の峯。

太郎の目、次郎の目、三郎の目、

ぴかりと光る三つの目、

ぴかり、ごろごろ鳴り出して、

(新漢字 低)

(008.jpg)

大きな雨が落ちて来る。

### 第三 萬壽(まんじゆ)の姫(ひめ)

源(みなもと)の頼朝(よりとも)が鶴(つる)が岡(おか)の八幡宮(はちまんぐう)へ舞(まひ)を奉納(ほうな)することに

なつて、舞姫(まひめ)を集めました。

十二人の中、十一人までは

ありましたが、あとの一人

がありません。困つて居

る所へ、御殿(ごてん)に仕へて居る



萬壽がよからうと申し出

た者がありました。頼朝は一目見た上でと、萬壽を呼出しましたが、顔も美しく、姿も上品に見えましたので、さつそく舞姫にきめました。萬壽は、其の時やうやう十三歳、舞姫の中では一番年若でした。

奉納の当日は、頼朝を始め、舞見物の人々が、何千人ともなく集りました。一番、二番、三番と、十二番の舞がめでたくすみましたが、其の中で、殊に人のほめ立てたのは五番目の舞でした。比の時には、頼朝もおもしろくなつて、一しよに舞ひ

(新漢字 品 殊)

(009.jpg)

ました。其の五番目の舞を舞ったのが、かの萬壽の姫であつたのです。

翌日(よくじつ)、頼朝は萬壽を呼出して、



「さてさて、此の度の舞は日

本一の出来であつた。お

前の生まれた所はどこ、又

親の名は何といふか。ほ

うびは望にまかせてやる

ぞ。」

と言ひました。萬寿は恐る恐る、

「別に望はごごいませんが、唐絲（からいと）の身代りに立

ちたうございます。」

と申しました。これを聞くと、頼朝の顔の色は

さつと變りました。變わるも道理、これには深い

事情があつたのです。

それより一年ばかり前の事です。木曾（きそ）の義仲（よしなか）の

家來手塚（てづか）の太郎光盛（みつもり）のむすめらが、頼朝に仕へて居

りましたが、頼朝が義仲を攻めようとするのを

さとつて、義仲の所へ知らせました。義仲から

(0100.jpg)

は、すぐ返事があつて、すきをぬらつて、頼朝の命を取れと、木曾の家に傳はつて居た大切な刀を送つてよこしました。

光盛のむすめは、其の後、晝夜、頼朝をねらひましたが、少しもすきがありません。かへつて、肌(はだ)身離さず持つて居た刀を見つけられてしまひました。

其の刀に見覚(おぼ)えがあつた頼朝は、「さあ、此の女にはゆだんが出来ぬ。」といふので、石のろうに入れてしまひました。唐絲といふのは、此の女のことでした。

唐絲には、其の時十二になるむすめがありました。これが萬壽の姫で、木曾に住んで居りました。これが風のとよりに此の事を聞いて、うばを連れて、鎌倉をさして上りました。二人は野を過ぎ、山を越え、なれない道を一月餘りも歩き続けて、や

うやく鎌倉に着きました。

先づ鶴岡の八幡宮へ参つて、「母の命をお助け下さい。」と祈り、それから頼朝の御殿へ行つて、うばと二人でお仕へしたいと願ひ出ました。陰日向をく働く上に、人の仕事まで引受けるように

(新漢字 晝 続)

(011.jpg)

しましたので、萬壽、々と人々にかはいがられました。

さて萬壽は、誰か母のうはさをする者は無いかと気をつけて居ましたが、十日たつても二十日たつても、母の名を言ふ者はありません。「あゝ、母はもう比の世の人ではないのか。」と、力を落して居りました。

或日の事、萬壽が御殿の裏へ出て、何の氣もなく

あたりを眺めて居りますと、小さい門がありま

した。そこへ下任(しもつかへ)の女が来て、「あの門の中へ、は

いりつてはなりません。」と申しました。わけを尋ねますと、

「あの中には石のろうがあつて、唐絲様が押（お）しこめられて居ります。」

と答へました。これを聞いた萬壽の驚と喜は、どんなであつたでせう。

三月二十日、今日はお花見といふので、御殿は人少（ひとすくな）でした。萬壽は其の夜ひそかにうばを連れて、石のろうをたづねました。八幡様のお引合はせか、門の戸は細めにあいて居りました。う

（新漢字 裏）

(012.jpg 挿絵あり)

ばを門のわきに立たせて置いて、姫は中にはいりました。月の光にすかして、あちらこちらさがしますと、松林の中に石のろうがありました。萬壽がかけ寄つて、ろうのとびらに手をかけますと、

「誰か。」

と、ろうの中から申  
しました。

萬壽は格子（こうし）の間か  
ら手を入れて、

「おなつかしや、母上様。 木曾の萬壽でござい  
ます。」

親子は手を取合つて泣きました。 やがてうば  
をも呼んで三人は、其の夜を涙の中に明かしま  
した。

これから後、萬壽は、うばと心を阿合はせて、折々  
ろう屋をたづねては、母をなぐさめて居りました。  
さうして其の明くる年の春、舞姫に出ることに  
なつたのでした。

(013.jpg)

親を思ふ孝子の心には、頼朝も感心して石のろ



うから唐糸を出してやりました。二人が互に取りすがつて、うれし泣きに泣いた時には、頼朝を始め、居合はせた者に、誰一人もらひ泣きをしない者はありませんでした。

頼朝は唐糸をゆるした上に、萬壽には澤山（たくさん）なほうびを與へました。親子は、うばもろともに、喜び勇んで木曾へ歸りました。

#### 第四 乃木（のぎ）大將の幼年時代

乃木大將は、幼少の時、體が弱く、其の上臆（おく）病であつた。幼名を無人といつたが、寒いと言つては泣き、暑いと言つては泣き、朝晩よく泣いたので、近所の人は、大將のことを「無人ではない、泣人だ。」と言つたといふことである。

大將の父は長府（ちようふ）蒲主（はんしゆ）に仕へて、江戸（エド）で若君のお

守役をして居たが、「自分の子がかう弱蟲の泣蟲

では、第一藩主に對しても申しわけが無い。どうかして大將の體を丈夫にし、氣を強くしなければならぬ。」と思つた。

(新漢字 幼 守)

(014.jpg 挿絵あり)

そこで、大將が四五歳の時から、父は薄(うす)暗(く)いうちに大將を起して往復四料(メートル)もある高輪(たかなわ)の泉岳寺(せんがくじ)

へ、よく連れて行つた。泉岳寺には名高い四十

七士の墓がある。父は途々義士の事を大將に

話して聞かせて、其の墓に参詣(さんけい)したのである。

或年の冬、大將が思はず「寒い」と言つた。父は、

「よし。寒いなら暖(あたたか)くなるようにしてやる。」

と言つて、大將を井戸端(ゐどはた)へ連れて行つて、着物をぬがせて、頭から冷水を浴びせかけた。大將は、

これから後、一生の間、「寒い。」とも「暑い。」も言はなかつたといふ。

母もまたえらい人であった。大將が何かたべ物の中にきらひな物があると見れば、三度々々の食事に、必ず其のきらひな物ばかり出して、大將がなれるまで、うち中の者がそればかりたべるようにした。 其のため、大將には、全くたべ物に好ききらひとい



(新漢字 往復 途義 必)

(015.jpg 挿絵あり)

ふものが無いようになった。

大將が十歳の年、一家は郷里へ歸ることになつ

た。 其の時大將は、江戸から大阪(おおさか)まで、馬やかご

に乗らず、両親と共に歩いて行つた。 當時、大將

の體は、もうこれだけ丈夫になつて居たのであ

る。

郷里の家は、小さい粗末な家であつた。けれど

も、刀・槍(やり)・長刀(なぎなた)など、武士の魂(たましひ)と呼ばれる物はいつ

もきらきら光つて居た。

此の父母の下に、比の家(ひの家)に育(そだ)つた乃木大將(乃木大将)が、一生忠誠(ちゆうせい)・質素(しつそ)で押(おし)通して、

武人(ぶじん)の手本(てほん)と仰(おほ)がれる

ようになったのは、まこ

とにい(に)は(は)れ(れ)の(の)あ(あ)る(る)こ(こ)と

である。

## 第五 水兵の母

明治二十七八年(めいし 27-28)戦役(せんぎやく)の時(とき)であつた。或日(あるひ)、我が軍艦(いくさふね)高千

穂(ほ) (か(か)ん(ん)た(た)か(か)ち(ち)ほ) の一水兵(いちすいへい)が、女(め)の字(じ)らしい手紙(てがみ)を讀(よ)み

ながら泣(な)いて居(ゐ)た。ふと通(と)りかゝつた某大(たがひ) (ぼうだい)

(新漢字 郷親粗末素役)

(0016. jpg 挿絵あり)

尉がこれを見て、餘りに女  
女しいふるまかと思つて、

「ごら、どうした。命が惜（お）

しくなつたか、妻子が懲

ひしくなつたか。 軍人

となつて いくさに出た

のを男子の両目（めんぼく）とも思

はず、其の有様は何事だ。

兵士の恥は艦の恥、艦の恥は帝國の恥だぞ。」

と言葉するどく叱（しか）つた。

水兵は驚いて立上つて、しばらく大尉の顔を見

つめて居たが、やがて頭を下げて、

「それは餘りなお言葉です。私には妻も子も

ありません。私も日本男子です。何で命を

惜しみませう。どうぞ、これを御覧（らん）下さい。」

と言つて、其の手紙を差出した。



大尉はそれを取つて見ると、次のような事が書いてあつた。

「聞けば、そなたは豊島沖の海戦にも出ず、又八

月十日の威海衛攻撃とやらにも、格別の働な

(新漢字 女 妻 男)

(0017. jpg)

かりきとのこと、母は いかにも残念に思うか候。

何の為(ため)にいくさには御出でなされ候ぞ。一

命を捨てて君の御恩に報ゆる爲には候はず

や。 村の方々は、朝に夕にいろいろとやさし

く御世話下され、『一人の子が御國の爲いくさ

に出でし事なれば、定めて不自由なる事もあ

らん。 何にてもえんりよ無く言へ。』親切に

仰せ下され候。 母は其の方々の顔を見る毎

に、そまたのふがひなき事が思い出されて、此

の胸は張りさくるばかりにて候。 八幡様に

日参致し候も、そなたがあつぱれなるてがら

を立て候ようとの心願に候。 母も人間なれ

ば、我が子にくしとはつゆ思ひ申さず。 いかばかりの思ひ出にて此の手紙をしたゝめしか、よくよく御察(さつ)し下されたく候。」

大尉は、これを讀んで、思はずも涙を落し、水兵の手を握つて、

「わたしが悪かつた。おかあさんの精神は感

心の外はない。 お前の残念がるのも、もつともだ。しかし、今の戦争は昔とちがつて、一人

(新漢字 残念候報每致願精)

(018. jpg)

で進んで功を立てるようは出来まい。

將校も兵士も、皆一つになつて働かなければ

ならない。 總べて上官の命令を守つて、自分

の職分に席を出すのが第一だ。 おかあさん

は、『一命を捨てて君恩に報いよ。』と言つて居ら

れるが、まだ其の折に出會はないのだ。豊島

沖の海戦に出なかつたことは、艦中一同残念に思つて居る。しかし、これも致し方がない。其のうちには、花々しい戦争もあるだらう。其の時にはお互に目ざましい働をして、我が高千穂艦の名をあげよう。此のわけをよくおかあさんに言つて上げて、安心なさるようにするがよい。」と言聞かせた。

水兵は頭を下げて聞いて居たが、やがて手をあげて敬禮して、につこりと笑つて立去つた。

### 自修材料 (一)

○二宮尊徳(にのみやそんとく)

二宮尊徳は、今から約百五十年前相模の栢山村(今神奈川懸に属す)に生  
まれた。五歳の時、大水のために、先祖から傳はつた田地は

(新漢字 功 官 職 會 禮)

すつかり洗ひ流されてしまった。其の上、間もなく父が長い病(やまい)の床(とこ)についたので、家は貧乏のどん底に落ちた。尊徳

ち は、少年ながら農事を習ひ、又病氣の父に代つて、村の人た

と一しよに、大水の跡始末(あとしまつ)にも出た。

十四の秋、彼が一生懸命(けんめい)で介抱(かいほう)したかひもなく父は世を去

り、十六の夏には、長い間の無理(むり)がたゝつて、母もとうとうな

せ くなつてしまった。尊徳のなげきは筆にも紙にも盡(つ)く

ない。親類の人々は、そうだんして尊徳を始め三人の子供を引取り、世話することになった。

口やか 尊徳が引取られたのは、伯父(おじ)の所であつた。伯父は

ましい人であつた。尊徳が暇さへあれば、本を讀みたがる

のをきらつて、「農家に學問はいらぬ事だ。暇があつたら、うちの仕事をせよ。」と言つて叱(しか)つた。しかし尊徳は「一生無學

の人となつては、父の家を興すことは出来ない。どうかして、自分の油で勉強したいものだ。」と思つた。

そこで川べりの洲(す)に油菜をまき、やがて其の實(み)七八升(しよう)を得

た。これを油屋へ持つて行つて、幾らかの油に取りかへた。

さうして、每晚家人の寝静(ねしづ)まるのを待ち、自分の油をともし

ては、心静かに勉強した。

## 第六 パナマ運河(うんが)

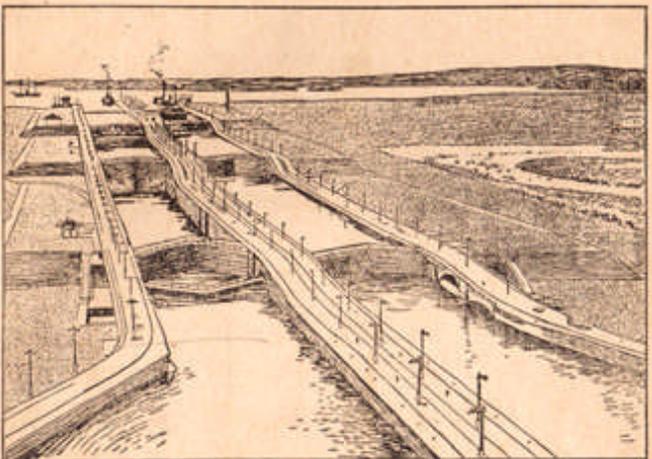
北ナメリカが南アメリカに、續く部分は、パナマ

地峽(ちきよう)といつて、地形がきはめて細長くなつて居る。此の地峽に造つた蓮河が、世界に名高いパ

ナマ運河である。

パナマ地峽は一帯に小山が起伏(きふく)して居る上に、地層にはかたい岩石が多い。其の外にもいろ

(新漢字 帶層岩石)



いろの理由があるの  
 で、此の地峽を切通し、  
 平かな掘割を造つて、  
 太平大西兩洋の水を  
 通はせることは、とう  
 てい出来ぬ事であつ  
 た。そこで此の運河  
 は、非常に變つた仕組  
 に出来て居るのであ  
 る。

湖 連 設

先づ地峽の山地を流れて居る川の水をせき止  
 めて、湖を二つ造つた。高い土地の上に水をた  
 たへたのであるから、湖の水面は、海面よりずつ  
 と高い。此の湖へ兩方の海から掘割が通じて  
 ある。ところで、此の高い湖と低い掘割を、何の  
 仕掛もなしに連結すれば、湖の水は瀧のように  
 掘割へ落込んで、とても船を通すことは出来な  
 いから、掘割の所々に水門を設けて、たくみに船  
 を上下するようにしてある。  
 今、太平洋の方から此の運河を通るとする。船

(020. jpg 挿絵あり)

いろの理由があるの

で、此の地峡を切通し、

平らかな掘割（ほりわり）を造つて、

太平・大西兩洋の水を

通はせることは、とう

てい出来ぬ事であつ

た。そこで此の運河

は、非常に變つた仕組

に出来て居るのであ

る。

先づ地峡の山地を流れて居る川の水をせき止

めて、湖を二つ造つた。高い土地の上に水をた

たへたのであるから、湖の水面は、海面よりずつ

と高い。此の湖へ兩方の海から掘割が通じて

ある。ところで、此の高い湖と低い掘割を、何の

仕掛（しかけ）もなしに連結すれば、湖の水は瀧（たき）のよう  
に

掘割へ落込んで、とても船を通すことは出来な

いから、掘割の所々に水門を設けて、たくみに船

を上下するようにしてある。

今、太平洋の方から此の運河を通るとする。 船

## (新漢字 湖 連 設)

(021. j p g)

は先づ海から廣い掘割にはいる。 しばらく進

むと、水門があつて、行く手をさへぎつて居る。

近づくると、門のとびらは左右に開いて、船が中に

はいり、とびらはしまる。 上手にも水門がある

ので、船は大きな箱の中に浮いて居る形である。

底の水道から水が湧(わき)出て、船は次第に高く浮上

る。 と上手の水門が開いて、船は次の、箱の中に

はいる。 前と同じ方法で、船はもう一段(だん)高く浮

上り、次の水門を越して、小さい人造湖に出る。

比の湖を横ぎると、又水門があつて、船は更に一

段高くなる。 かうして、前後三段に上つた船は、

海面より約二十六米(メートル)も高い水面に浮かぶので

ある。

それから、船はクレブラの掘割を通る。これは高い山地を切通したもので、こゝを切通すのは非常な難工事であつたといふ事である。掘割

を通過して、船は又湖に出る。ガツン湖といふ

大きな人造湖で、湖上に點々と散在して居る島

島は、もところゝにそびえて居た山々である。此

の湖を渡つて、又水門を通過する。今度は前と

(新漢字 法 湖 難 過 點 散 在)

(022. j p g)

反對に、順次に三段を下つて、

海と同じ水面に浮かぶ。こ

こから又掘割を走つて、終に

洋々たる大西洋に出るので

ある。運河は延長五十哩(マイル)餘

り、凡そ八時間前後でこれを

航することが出来る。

パナマ地峡に運河を造る事

は、数百年來ヨーロッパ人の

しばしば計畫した所で、實地

に大仕掛の工事を行つた事もあつたが成功を

見るに至らなかつた。最後にアメリカ合衆國

は、國家事業として此の工事に着手し、十年の歳

月と八億（おく）圓の費用とを費して、紀元千九百十四

年、遂にこれを造り上げたのである。

米國が此の運河を造るに成功したのは、主とし

て、最新の學理を應用したからであつた。衛生（えいせい）

の設備をよくして危険（きけん）な病氣を根絶（こんぜつ）し、幾  
萬の

従業員の健康（けんこう）をはかつた事や、ほとんどあらゆる

文明の利器を運用して、山をくづし、地をうが

（新漢字 順 終延 凡 數 威 着 費 米 應 設 備 從  
文 利）

（023. jpg 挿絵あり）

ち、河水をせき止めた事など、

一としてそれをらぬものは

無い。

昔、太平・大西南洋の間を往來する船は、はるか南アメリカの南端を大廻りしなければならなかつた。しかし、パナマ運河の開通以來は、此の不便が無くなり、したがつて、世界の航路に大ききを變動を生じたのである。

## 第七 馬鈴薯王

大正十五年（一九二六年）三月二十七日、アメリカよりの通信は、いはゆる馬鈴薯王牛島（うしじま）謹爾（きんじ）君の死を傳へた。

アメリカの新天地を開拓（かいたく）した日本人中、彼は最も白人間に重きをなし、馬鈴薯王ジョージ、シマの名は、子供にも知られて居



る。彼の事業地スタックトンは、最初彼が旗あ

(新漢字 端 開 便 初)



(024. j p g)

げをした頃には、人口僅か五千にも満たない所  
であつたが、其の後三十年、彼の力によつて次第  
に開けて行き、今では人口八萬を數へる盛大な  
土地となつた。

自分が彼を訪(たづ)ねたのは、大正十年八月の事であ  
つた。

サクラメント川とサン、オーキン川とが合して

太平洋に注ぎ人らうとする所に、約四十万哩(マイル)の  
三角洲(デルタ)がある。さうして、そこには五千アルケ  
ール乃至二萬アルケールぐらゐの島が六十幾

り出來上つて居る。彼の事業地は即ちこゝで、

これらの島々の中、其の三分の二は、實に我が馬

鈴薯王の勢力範圍(はんい)に屬して居るものである。

自分たちの一行を乗せたモーターボートは、彼

の名譽(めいよ)を記念して名づけられたといふシマ島(アイランド)

やキング島(アイランド)などの間を、勢するどく、水を切つて進んで行つた。

たしか、ベーコン島(アイランド)といふ島に上つた時であつたと思ふ。馬鈴薯王は、軒(のき)を並べた倉庫(そうこ)に案内

したが、見るとどの倉庫もどの倉庫も、皆玉ねぎ

(新漢字 口 數 盛 注 即 属)

(025. jpg)

の袋(ふくろ)と馬鈴薯の袋とで一ぱいになつて居る。

「戦時中は相場がうなぎ登りに上つても、皆、羽

が生えて飛んで行つたものです。今では、値

が下る一方ですが、それで此の通り、一向(いつこう)は

けまいのです。御覽(らん)なさい、馬鈴薯もねぎも

皆芽を出して居ます。 やれ、豊作だ、凶作だ、そ

れ戦争だ、休戦だなどと言つても、結局(けっきょく)損も得

も運です。人間は、やっぱり人間です。神様ぢやないから。」

馬鈴薯王は、こんな事を言つて笑つた。

自分が馬鈴薯王と曾見したのは、後にも先にも、たゞ此のスタックトンにおける一回だけであつた。したがつて、もう此の外には、書きつけるほどの思出も無いが、或人の書いたものに、此の人についておもしろい逸話がある。

或日、ジョージ、シマと、スタックトンからバーク

レーの其の自宅まで、一しよに行つたことがある。バークレーの停車場（ていしやぢよう）に着くと、彼の自

動車が待つて居た。私たちがそれに乗らう

とすると二人のみすばらしいアメリカ婦人

（新漢字 相 豊 作 休 損 得 婦）

(026. jpg)

が、大きなかばんをもてあまして居た。彼は、

其の女に、どこへ行くのかと聞いた。女は、どこそこへ行くと答へた。すると、彼は「ぢや、これに乗りたまへ。」と言つて、自ら其のかばんを持ち、此のみすばらしい女を自分の自動車に

乗せてやつた。女は驚いて居たが、やがて粗

末な自分の家の前に着くと私に此の日本人

は誰かと聞いた。私は、あの方はジヨージ、シ

マだと言ふと、女は、「おゝ、馬鈴薯王かと言つて

飛立つように喜び、「私は一生此の名譽ある同

乗を忘れない。どうか、私の千べんのありが

たうといふ言葉を受けて下さいと言つて、彼

の手を握つた。かうした日本式の陰徳を、彼

は、方々で落して歩いた。廣大な農場を見廻

りに歩く時でも、暑い日盛りに、労働者たちが

一生懸命（けんめい）働いて居るのを見て、其の中で、何か

ちよつと気に入つた事でもあれば、「これで靴（くつ）

でも買へ。」と言つて、五ドル紙幣（しへい）を投出すこと

などもある。又毎日々彼の事務所と自宅

へは、いろいろの寄付金(きふきん)取が押(むし)寄せるが、  
それ

(新漢字 乗 廣 農 場 勞 働 務)

(027. jpg )

らに對しても、彼は毎年どれだけの金を投出

したことがわからぬ。

彼の頭の振(ふり)方一つで、アメリカの馬鈴薯相場が

上下したのは言ふまでもまく、彼は在米日本人

會長としては、我が同胞(どうほう)の中心人物となり、太つ

腹(はら)を親分として推服(すいふく)せられ、又事業家・成  
功家と

して白人間にも重きをなして居たのであるが、

久しぶりの歸朝間際(まぎは)に、六十二歳で世を去つた。

思へば惜しい事である。日本の爲にも、世界の

為にも。

第八 廣瀬中佐(ひろせちゆうさ)

とどろく砲音飛來る彈丸。

荒波洗ふデッキの上に、

やみをつちぬく中佐の叫。

「杉野(すぎの)はいづこ、杉野は居ずや。」

(新漢字 久 朝 荒)



(028. jpg)

船内くま無く尋ぬる三度(みたび)、

呼べど答へず、さがせど見えず、

船は次第に波間に沈み、

敵弾いよいよあたりにしげし。

今ほとボートに移れる中佐、

飛來るたまに忽ち失せて、

旅順港外、うらみぞ探き、

軍神廣瀬と其の名残れど。

## 第九 神風

博多（はかた）の沖は、見渡す限り、元（げん）から押（おし）寄せた船でお

ほはれた。十何萬といふ大軍である。 四國・九

州の武士は、博多の濱に集つた。元の兵は一人

も上陸させぬといふ意氣ごみで、濱邊に石垣（いしがき）をきづいて守つた。

我が軍は、敵の攻寄せるのを待ちきれず、こつち

から押寄せた。 敵は、高いやぐらのある大船、こ

つちは、釣（つり）舟のようを小舟であつた。けれども、

（新漢字 波 失 旅 邊）

（029. jpg 挿絵あり）

我が武士は、船の大小

などは、少しも氣にし

なかつた。草野次郎

の如きは、夜、敵の船に

押寄せて、首を二十一

取つて、敵の船に火を

かけて引上げた。敵

は、此の勢に恐れて、鐵

のくさりで船をつな

ぎ合はせた。まるで、

大きな島が出来たよ

うなものである。

河野通有(かうのみちあり)は、たつた小

舟二そうで向かつた。

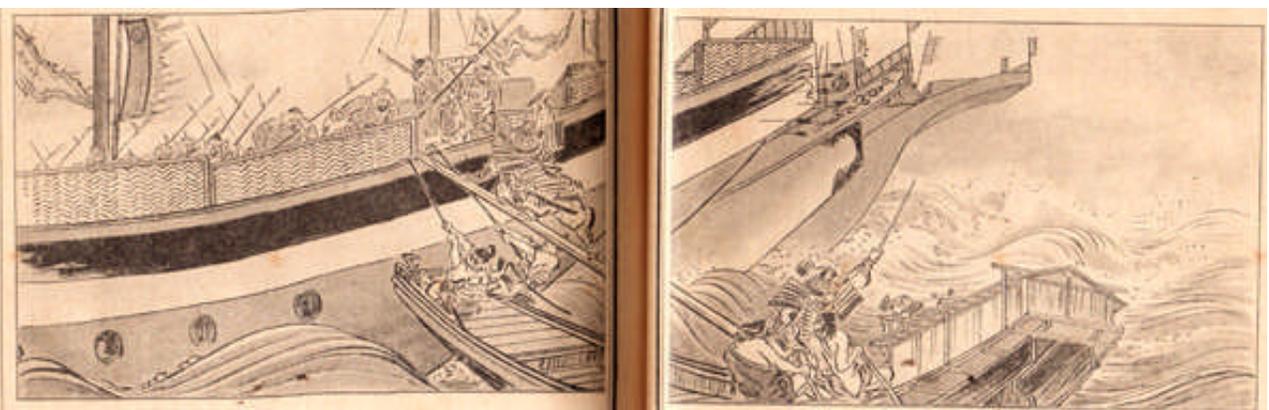
敵は、はげしく射立て

た。味方は、ばたばた

とたふれた。通有も

左の肩(かた)を射られたが、

少しも屈(くつ)せず、刀をふ



るつて進んだ。いよ

(030. jpg)

いよ敵の船に押寄せたが、高くて、上ることが出来  
ない。通有は、帆柱をたふして、これをはしご  
にして、敵の船へをどり込（こ）んだ。味方は、後から  
後からと續いた。さんざんに切りまくつて、其  
の船の大將を生けどりにして引上げた。

其の後も、攻寄せる者が絶（た）えないので、敵は一先  
つ沖の方へ退いたが、又押寄せて来るのは明らか  
かである。

實に、我が國にとつては、これまでに  
無い大難であつた。

恐れ多くも、龜山上皇（かめやまじょうこう）は、御身を以て困難  
に代ら

うとお祈りになつた。武士といふ武士は、必死

のかくごで防いだ。百姓も、一生懸命で、兵糧を

運んだ。全く、上下の者が心を一にして、國難に

當つたのである。

此の眞心が、神のおぼしめになつたのであらう、一夜、大風が起つて、海は湧返つた。敵の船は、こつぱみぢんにくだけで、敵兵は、海の底に沈んでしまつた。生きて歸つた者は、數へるほどしかなかつたといふ。

## 自修材料 (二)

(新漢字 帆 退 明 以 必 防 運 當)

(031. jpg)

### ○二官尊徳(つゞき)

尊徳は或時道ばたに捨(す)ててあつた稻(いね)の苗(なへ)を拾つて、「もつた

いない事だ。」と思つて、こゝろみにそれを川べりのあき地に植ゑつけて置いた。さうして、おこたらず手人をして居たところが、秋になつて、見事に實のつた。ほんとうの田の稻にも負けない豊かな穂であつた。彼はこれを刈取つて、始めて自分の米と名のつく米を得た。

次の年にも又次の年にも、彼は此の捨苗の利用を續けた。

さうして、これによつて得た利益(りえき)をたくはへ、それを持つて、

二十歳の時、荒れはてた我が家に歸つた。母のさとにあづけてあつた弟二人も迎へ取つて、貧しいながらも、こゝに始めて獨立の生活をする事になつた。

彼は後年「小を積んで大を成(な)す。」といふのを治産(ちさん)の?(シミあり)として

教へたが、それは此の捨苗の利用の經驗から得た教訓であつたのである。

## 第十 燈臺守のむすめ

イギリスの東海岸に、ロングストーンといふ島

がある。其の一角(かく)にそびえて居る燈臺に、年と

つた燈臺守が、妻とむすめと三人で、わびしく其

の日を送つて居た。波風の外には、友とするも

のも無い此の島で、老夫婦のなぐさめとなるも

のは、氣だてのやさしい一人むすめのグレース、

ダーリングであつた。

或秋の夜の事である。一その船が、にはかの

(新漢字 臺 夫)

(032. jpg)

あらしにおそはれて、此の島に近い岩に乗り上げた。船は二つにくだけて、船尾の方は、見る見る大波にさらはれてしまった。岩の上に残つた般體には、十人ばかりの船員がすがり附いて、聲を限りに救ひを求めたが、何のかひも無かつた。

夜がほのぼのと明けた頃、荒狂(くる)ふ海上を見渡したグレース親子は、ふと、はるかの沖合に、かの難破船をみとめた。むすめは驚いて、

まあ、かはいさうに。おとうさん、早く助けに行きませう。早く早く。

「あの波を御覧(らん)。かはいさうだが、とても、人間わざでは救へない。」

「私は、とても、人の死ぬのをじつと見ては居ら

れません。 さあ、行きませう。命を捨(す)ててか  
かつたら、救へないことはありませんまい。」

此のけなげな言葉は、遂に父を動かした。二人

は早速(さつそく)ボートを出す支度(したく)に取りかゝつた。

やがてボートは岸を離れた。 打返す磯(いそ)波にま

き込(こ)まれたかと思へば、忽(たちま)ち大波にゆり上げ、ゆ

(新漢字 尾 附 求 破)

(033. jpg 挿絵あり)

り下げられながら、沖へ沖へ

と突進む。親子は死力を盡

くして潜(こ)ぎに漕いだ。岩の

附近は波がいよいよ荒狂ふ。

打寄せる大波、打返すさか波、

危く岩に打附けられ、忽ち死

の口に呑(の)まれようとする。

一進一退、たゞ運を天にまか

せて二人はボートをあやつ



つた。

からうじて、ボートは、かの難破船にたどり着いた。生残つた船員は、涙を流して喜んだ。親子は非常な危険ををかして、人々をボートに収容（しゅうよう）し、又有らん限りの力をオールに注いで、我が家へと向かつた。つかれ果てた人々も、親子の勇ましい働にはげまされて、我も我もと力をそへる。かくてボートは再び荒波を切抜けて、燈臺に歸り着いたのである。

二日たつて、天氣も晴れ、波もをさまつた。グレ

ースの眞心こめた看護（かんご）によつて、全く元氣を回

（新漢字 盡 附 危 退 危 檢 有家）

（034. jpg 挿絵あり）

復した人々は、親子に厚（あつ）く再生の恩を謝（しや）し、名残（なごり）

を惜（を）しんで此の島を去つた。

今まで人にも知られなかつた燈臺守のむすめ

グレース、ダーリングの名は、ほどなく國の内外

に傳はつた。むすめの勇ましい行為（こうい）は、歌に歌はれ、其の肖像畫は到る處の店頭に飾られた。

## 第十一 参宮だより

昨日午後、此方へ着いて、外宮へお参り

し、今日は内宮（ないぐう）へお参りしました。

宇治（うち）橋を渡つて、神（しん）

苑に入り、しばらく

行くと、千年もたつ

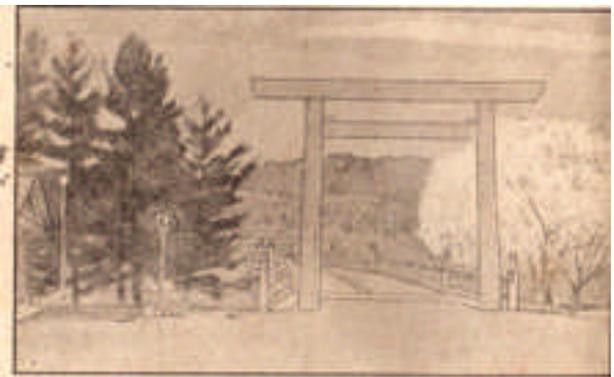
たかと思はれる大

木が立ち並んで居

て、何とも言へない

ありがたい感じが

しました。



五十鈴（すず）川のきれいな水で、手を洗ひ、口

をすゝいで、

御門の前に

進んで拝み

ました。神

殿は外宮と

同じように、

お屋根をか

やでふき、棟

にかつを木

を並べ兩端に千木が付けてあります。

一切木造りで、金の金具がきらきら

として居ますが、其の外には両の飾(かざり)も

ありません。まことに神々(かうがう)しくて、自

然(しぜん)に頭が下りました。

お参りをすましてから、方々を見物し

て、二見に來ました。



今夜はこゝでとまります。明日は、朝早く日の出を拝み、それから京都へ立

(新漢字 千切白)

(036. jpg)

ちます。お土産に貝細工を買ったから、楽しみにして待つてお出でなさい。

月 日 父より

さち子 殿

## 第十二 トマス、エヂソン

電燈の發明せられたのは、今から凡そ百十餘年前の事である。當時は單に理化學の實驗用と

して使用せられるのに過ぎなかつたが、次第に改良せられて、四五十年の後には、燈臺等にすゑ

つけられるようになった。けれども、これは今

日のアーク燈に類するものであつて、公園・街路(がいろ)

等の照明(しようめい)用としては適當であつたが、室内に用

ひるものとしては、餘りに大仕掛（じかけ）であり、光力がつよ今強過ぎて、實用に適しをなかつた。それで、これらの缺點の無い電燈が發明されることは、當時の人の最も希望する所であつた。

かねて此の希望を満たさうと思つて居たトマス、エヂソンは、すでに電話機に關する發明に成功したので、更に進んで新しい電燈の發明に従

（新漢字 單 驗 使 改良 類 適用 缺 希望 關）

（037. jpg 挿絵あり）

事した。 さうして、これもほ

とんど成功に近づいたが、た



だ心（しん）の事になると、なかなか

思ふように行かない。 初め

彼は、紙に炭素（たんそ）をぬつて試みたが、思はしい結果が得られをかつた。 次には白金其の他の金属の針金で様々の實驗をしてみたが、これも失敗

に終つた。 そこで、再び炭素線の研究に没頭（ぼつとう）し

たが、徒らに多くの時と金とを費したに過ぎなかつた。

或目の事であつた。エヂソンは、例の如く實驗室に閉ぢこもつて、研究に餘念が無かつた。其

の時、ふと彼の目に入つたのは、机（つくゑ）の上に置いてあつた、形の珍しい一本の団扇（うちわ）であつた。

何心なく手に取つて、しばらくそれを眺（なが）めて居た彼の眼は、やがて異様（いよう）にかゞやき始らた。彼の眺め入つたのは、繪でもない、紙でもない、實に其の団扇に用ひられて居た竹であつたのである。

彼は、すぐに竹で炭素線を作つて、實驗してみた。

（新漢字 試 失敗 研究 徒 例）

(038. jpg)

ところが豫想（よそう）以上の好結果を得た。そこで彼は、人を世界の各地につかはして竹を採集させ、

それについて一々綿密（めんみつ）な研究をした。其の結

果、日本の竹が最も通當であることがわかつた

ので、専（もつぱ）らこれによつて心（しん）を製出し、其の電球は

忽（たちま）ち世界に廣まつた。

エヂソンは紀元千九百三十一年、八十五歳を以

て歿したが、彼によつて發明せられたものは、電

話・電燈・電信・電車・活動寫眞・蓄音機（ちくおんき）に関するもの

などきはめて多く、アメリカで特許を得たもの

だけでも、其の數は實に千餘に及んで居る。今

日文明の利器といはれて居るもので、直接・間接

に、彼の天才によらまいものはほとんど無いと

いつてもよい。

### 第十三 鐵工場

#### 工場の

高い天井（てんじょう）、

其の下に

動く起重機は、

(新漢字 好 採 集 許 直 接 起)

(039. jpg)

生きて居るように、

あらがねを

櫪(ろ)に持運ぶ。

夜も、晝も、

櫪の火はもえて、

火の柱、

ほのほの柱。

流れ出る鐵は、

青白い

火花を散らす。

ものすごい

機械のひびき、

其の中に、

働く人の

腕の太さよ、

筋肉（きんにく）の

たくましさよ。

自修材料（三）

(040. j p s)

○二宮尊徳（つゞき）

或時、尊徳は近所の家へ鋤（くは）を借（か）りに行つた。  
ところが、あい

にく其の家で種まきを始めて居て、「これがすんだら貸して  
上げます。」と言ふ。そこで、尊徳は、

「今日は、どうせ鋤が借りられるまでは用の無い體です。

鋤をお出しなさい、私がやつて上げませう。」

と言つて、鋤を取上げ、せつせと種まきを手傳つたので、わ  
け

なくすんでしまつた。近所の人は喜んで、

「やれやれ、御苦勞様でした。鋤に限らず、何なりと御用の

物はいつでも使つて下さい。」

と、快(こゝろよ)く鍬を貸してくれた。

尊徳はこゝでも又一つの教訓(きょうくん)を得た。「人は自分の爲(ため)には

かる心がある間は、結局(けつぎよく)、自分も利することは出来ない。人

の爲を一途(づ)にはかると、自分も其のおかげを受けるものだ。

ちようど、たらひの水を手前へ手前へとすくへば、水はかへつて向かふへ向かふへと逃げるが、向かふへ向かふへと押(お)

しやると、水がかへつて手前へ寄つて来るようなものだ。」

彼はこれを其の教の一箇條(かぢよう)として常に人にさとした。

#### 第十四 豊田佐吉(とよださきち)

明治二十三年(一八九〇年) 東京に博覧會(はくらんかい)が開かれた時の事である。田舎(ゐなか)者らしい一人の青年が、毎日々々機械館に來ては、そこに陳列して

ある機械の前にすわつて、じつとそれに見入つ

て居るのであつた。掛（かゝり）の人々は、とうとう彼を

（新漢字 館）



(041. jpg 挿絵あり)

怪しい者とにらんで取調べた。調べてみると、

氣ちがひでも何でもなかつた。 非常な機械好

きで、しかも愛國心の強い青年であつた。

彼はそこに並べてある機械を指さして、

「これは皆外國品ばかりではないか。こんな

事で日本の將來をどうする。 今に私は立派

な國産品を作つて、きつと外國品を追拂（はら）つて

見せる。」

と、堅（かた）い決心を語つた。此の青年こそ、後に自動

織機（しよくき）を發明して、世界の工業界に名をとどろか

した豊田佐吉其の人であつた。

佐吉は静岡縣の田舎に生まれ

た。初め大工（だいく）として働いて居

だが、其のうちに織機の改良を

思い立ち、暇さへ、あれば、方々の

織場を見て歩いた。時には、機械をこはしたと

言つて叱（しか）られ、村の青年たちからは、男のくせに

女のまねをするとあざけられた。かうした苦

心を重ねて、佐吉は木製の改造織機を作つたが、

實驗してみると、失敗であつた。それ見た事か

（新漢字 調 産 語）

(042. j p g)

と人々はあざけり笑つた。しかし、佐吉は、何と

言はれても、たゞだまつて研究を續けて行つた。

博覧會を見に行つたのも、此の頃の事であつた。

歸つてからの彼の努力は、一層目ざましかつた。

さうして、其の年の秋、木製機械の改造に見事成

功した。二十四歳の時であつた。

其の後、佐吉は更に動力を使用する機械の發明

に成功して、それが廣く世間に使用されるよう

になった。或會社では、此の織機と外國製の織機とを二年にわたつてためしてみたが、残念にも佐吉の機械は、外國製に及ばなをかつた。佐吉は涙を流してくやしがつた。更に三年の後、外國品にまさるものを、どうにか作り上げることが出來た。

しかし、此の成功に満足してしまふ佐吉ではなかつた。彼は、ほとんど其の一生を織機の改良にさゝげた。大正十五年（一九二六年）、彼は遂に世界無比の自動織機を發明した。それは、たて糸が切れゝば、自動的に運轉が止り、よこ糸が無くなれば、自動的にこれをおぎなふ仕掛（しかけ）にな

（新漢字 努 比的 轉）

（040. jpg 挿絵あり）

つて居る機械で、一人で

四五十臺を取扱（あつか）ふこと

が出来る。彼が織機の

研究を始めてから四十

餘年、氣ちがいといはれ、

貧苦と戦かい、あらゆる困

難に堪へて、遂に此の成

功を見たのである。

發明に対する彼の熱心（ねっしん）

は、まことに驚くべきも

のがあつた。朝は誰よりも早く起きて研究室

に入り、夜もおそくまで閉ぢこもつて居るので、

家族の人は、彼が何時（いつ）寢（ね）たかも知らない事が多

かつた。

こんな事もあつた。いつもの如く研究室には

いつた佐吉は、日が暮れても出て來ない、夜なか

過ぎてても出て來ない。遂に夜が明けて鶏（にはとり）が鳴

いた。東の空に朝日が上つた。家族の者が心

配して、研究室へ行つて見ると、とたんに佐吉は、

圖面を片手に、勢よく飛出して來た。さうして、

(新漢字 貧 困 族 圖)

(044. jpg)

一さんに工場へ走つて行つた。

「おい、誰も居ないか。」

と、佐吉は叫んだ。 工場はがらんとして居る。

後からついて行つた家族の者が、

「今日は元日でございます。」

と言つたので、

「はゝゝ、さうだつたか。」

と大笑ひした。

佐吉は、夜通し考へた事を實際に作らせようと  
思つて元日とも知らず、飛込んだのであつた。

第十五 ブラジルにおける日本人

今やブラジルには三十萬近い日本人及びいはゆる日系伯人が居る。 さうして彼等は

、ブラジル國初展の爲にも、又故國日本の名譽の爲にも、  
一生懸命（けんめい）になつて働き、其の手に成つたものは、  
コーヒーにせよ、綿花（めんか）にせよ、米にせよ、とうもろ  
こしにせよ、馬鈴薯（ばれいしょ）にせよ、或は蔬（そ）・菜（さい）・  
柑（かん）・橘（きつ）にせよ、  
皆其の質のすぐれて居ることは、何人も認（みと）める  
所であり、其の量もまた決して少くない。

（新漢字 際 系 伯 展 故 成 量）

(045. jpg)

しかし、此の盛んな有様を見て、ブラジルにおけ  
る日本人の活動は、最初から、かういふ風であつ  
たと思ふならば、誤（あやまり）である。

成功は總べて努力

の結果である。 たゞかゞやかしい成功の場面  
ばかりを見て、こゝに達した苦心・努力の道中を  
忘れてはならぬ。

一體、日本の集團移民が、始めて、此のブラジル國

へ來たのは、さう古いことではない。 日本の歴

史でいふならば、いはゆる日露（にしろ）戦争の後であつ

て、明治四十一年約八百の移民が水野龍氏（みづのりゆうし）に率（ひき）

ゐられ、笠戸（かさど）丸によつて渡來したのが、其の初である。

其の後は、たとへ人數の多少はあつたにしても、とにかく毎年移民の渡來があり、それがだんだんふえ廣がつて、遂に今日の多數をなすに至つたのである。

コロニヤの生活は、今日でも決して樂なものであるが、初頃に來た移民たちの苦勞を思へば、今の人たちは仕合である。以前は在留邦人（ざいりゆうじん）の數が少かつたために、何かにつけて不便が多く、

（新漢字 達 團 移 渡 數 多 樂）

互に經驗が足りないために、思はぬ失敗をしたり、ポルトガル語を知らないために、思はぬ損をしたりすることが少くなかつた。 新に移住地

を作るにしても、全く命がけの仕事であつた。

例へば平野（ひらの）植民地創設（そうせつ）の時の如き、幾人の人が

マレイタの犠牲（ぎせい）となつて、命を捨（す）てたことであらう。

しかし、いかをる困難にあつてもくじけないの

が、日本人の特色である。日本には「艱難、汝を玉にす。」といふ言葉がある。又「思ふ念力、岩をも通

す。」といふ言葉がある。此の精神で進んで來た

からこそ、ブラジルにおける日本人は、遂に今日

あるを得るに至つたのである。けれども、彼等

の仕事は、これで完成したのではない。

成どころか、實は今やつと山のふもとへ着いた

ばかりである。山へはこれから登らなければ

ならないのである。さうして此の山へ登る者

は、これから大人となつて、世に出る諸君である

ことを知つたならば、諸君の責任がいかに重い

かがわかるであらう。

(047. jpg)

ブラジルの土地は廣い。それと同じように、諸

君の前途も廣大無邊である。諸君が今後此の

ブラジルにおいてなすべき仕事は、實際、無限無数に存するのである。

## 第十六 害蟲と益(益)蟲

我々の同圍(しゅうい)には、様々の蟲が居るが、これらの蟲は、皆、我々人間と、いろいろの意味における交渉(こうしょう)をもつて居る。例へば蠅は、きたない物にでも平氣でとまるから、時に恐しい病毒を人に傳へ

ることがあり又蚊(か)や蚤(のみ)もむやみとさすから、ずいぶん人に苦痛を與へる。ところが、蜜蜂(みつはち)や蠶(かひこ)

などは、これらと違(ちが)つて、人間に必要なものをこしらへてくれるから、人間の爲(ため)に役に立つ蟲で

ある。 前者のように、人間に害をなすものを害蟲といひ、後者のように、人間の役に立つものを益蟲といふ。

害蟲・益蟲とも、其の種類は甚だ多いが、豊作物に附く害蟲は、農家にとつて、最もにくむべき敵である。

(新漢字 限 存 害 蟲 益 痛 要 種)

(048. jpg 挿絵あり)



コーヒーの實ををかすブローカといふ蟲がある。 其の形きはめて小さく、粟(あは)粒ぐらゐの蟲であるが、此の蟲はコーヒー



ーの實に穴をあけ、おびたゞしく繁殖(はんしよく)する。しかも、これを驅除(くじよ)する方法がすこぶる困難であるから、かつて、ブラジル全土のコーヒー園は、これがために非常に困つたことがあつた。

ところが不思議なもので、此のブローカに寄生してこれを食べる蟲がある。 名をウガン



ダ蜂といふ。ブラジルとしては甚だ貴

重なものであるから、近來盛んにこれを飼養（しよう）し、  
其の交果（こうか）を相當にあげることが出来るように  
なつて居る。これもごく小さい蟲である。

油蟲（あぶらむし）は廣く作物に附く害蟲であるがこれを最  
もよく退治する益蟲は、てんとう蟲である。

棉の害蟲には、根切蟲と尺とり蟲がある。根切

蟲は、棉の根の太い部分や地際

莖（くき）に食入り、これを枯（から）してしまふ  
のである。

尺とり蟲は、棉の葉や枝をどを食ふ。尺とり蟲



（新漢字 實 寄 貴 際）

（049. jpg 挿絵あり）

は特に繁殖が速いから、發生  
したら、初期のうちに驅除し

なければならぬ。此の蟲の

驅除法には、藥劑（やくざい）を用ひるのである。

蟻（あり）は大群をなして、複雑（ふくざつ）な社會生活をして居る蟲である

が、其の或者は、「蟻がブラジルを殺すか、ブラジルが蟻を殺



すか。」と言はれるほど、農作物には大害を與へる

恐しいものである。赤蟻の巢（す）の大きなものに

は、深さ十米（メートル）、廣さ十米（メートル）平方にも達するものがあ

るといふ。鏡の大きい大型（がた）の赤蟻は蟻塚（ありづか）を

つてすみ、雨の降る時は大てい巢の中に居り、日

中盛んに作物の葉や芽を食荒す。

白蟻は非常

に大きな塔を作つて巢を營み、甘蔗（さとうきび）・稻（いね）等の

禾本

科植物や、馬鈴薯などの根に附く。

時には家屋の木材等をも食ふことがある。 蟻

の駆除には普通（ふつう）薬劑を用ひて居るが、又焼いたり、其の巢を破壊（はかい）したりすることもある。

（新漢字 速 期 群 營 屋）

（050. jpg 挿絵あり）

とうもろこしには、穀象（こくぞう）といふ蟲が附く。これは米、其の他の穀類をもをかす害蟲である。

ガファニョットは、日本でいふ「ばつた」であるが、これが大群を透して遠い所から飛んで來る時は、空も暗くなるといふことである。



右に擧（あ）げたものの外にも、いろいろの害蟲がある。これらは、何れも農作物ををかして人間に害を與へるものであるが、益蟲は、これら害蟲を退治する蟲であるから、大切にしなければ

ればならぬ。ウガンダ蜂・てんとう蟲の外、草か  
げろふやとんぼは、やはり益蟲である。

## 第十七 千早(ちはや)城

楠木正成(くすのきまさしげ)がたてこもつた千早城は、けはしい山

にあるが、まことに小さい城で、軍勢も僅(わづ)か千人ばかり。これを圍んだ賊(ぞく)は、百萬といふ大軍で、城の附近一帯は、すつかり人馬でうづまつた。

こんな山城一つ、何ほどの事があるものかと、賊が城の門まで攻上ると、城のやぐらから大きな

(新漢字 他 何 馬)

(051. jpg)

石を投落して、賊のさわぐ所をさんざんに射た。

賊は、坂からころげ落ちて、忽(たちま)ち五六千人も死ん

だ。

これにこりて、賊は城の水を絶（たや）して苦しめようとはかつた。先づ、谷川のほとりに、三千人の番兵を置いて、城兵が汲（く）みに來られないようにした。城中には、十分水の用意がしてあつた。二日たつても三日たつても、汲みに來ない。番兵がゆだんをして居ると、城兵が切込（こ）んで來て、旗をうばつて引上げた。

正成は、比の旗を城門に立ててさんざんに賊の悪口を言はせた。賊がこれを聞いて、くやしがつて攻寄せると、正成は高いがけの上から大木を落させた。さうして、これをよけようとして賊のさわぐ所を射させて、又々五千人餘りも殺した。

此の上は兵糧攻（ひょうろうげめ）にしようと思つて、賊は攻寄せないことにした。

或朝、まだ暗いうちに、城中から討（う）つて出て、どつ

とときの聲をあげた。 賊は「それ、敵が出た。

一

(新漢字 悪)

(052. jpg 挿絵あり)

人ものがすな。」と押(おし)寄

せた。 城兵はさつと

引上げ、たゞ、二三十人

だけはふみとゞまつ

た。賊が四方からこ

れを目がけて押寄せ

ると、城から大きな石

を四五十、一度に落し

たので、又何百人か殺

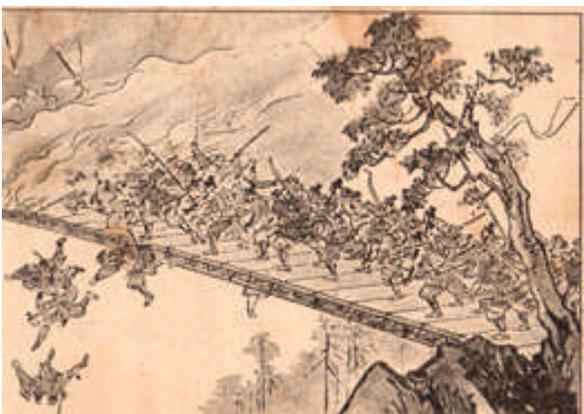
された。 ふみとゞま

つて居たのはみんなわら人形であつた。

もう此の上は、何でもかでも攻落してしまへと

いふので、賊は大きなはしごを作り、これを城の

前の谷に渡して橋にした。



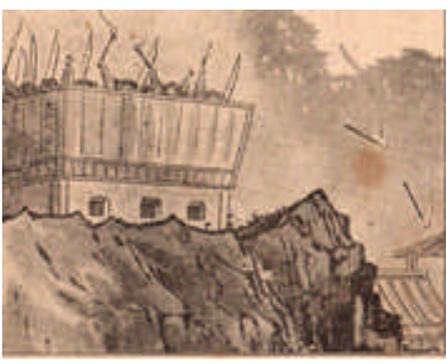
幅(はば)が五米(メートル)、長さが五六十米(メートル)、  
其の上を、賊が我先にと渡

つた。 今度こそは、千早城

も危く見えた。すると、正

成はいつの間用に用意して

置いたものか、澤山(たくさん)のたい



(053. jpg)

まつを出して、これに火をつけて、橋の上に投げ

させた。 さうして、其の上へ油を注がせた。 橋

は、真中から燃切れて、谷底へどうと落ちた。又

賊は何千人か死傷(ししよう)した。

賊が、千早城一つをもてあまして居ると、方々で、

官軍が賊の兵糧の道をふさいだので、賊はすつ

かり弱つた。 百人逃げ、二百人逃げして、初め百

萬といった賊も、しまひには十萬ばかりになつ

た。それが、又前後から官軍に討たれて、散り散

りに逃げてしまった。

## 第十八 和歌

君が代は千代に八千代にさぐれ石の  
いはほとなりてこけのむすまで

しきしまのやまと心を人間をば

朝日ににほふ山ざくら花

急がずばぬれざらましを旅人の

後よりはるゝ野路のむらさめ

(新漢字 油 和 歌 代 路)

(054. jpg 挿絵あり)

第十九 木下藤吉郎(きのしたとうきちろう)

豊臣秀吉(とよとみひでよし)がまだ木下藤吉郎といって、織田信長(おだのぶなが)

の草履取(ぞうりどり)をして居た時の事である。 信長は、よ

第十九 木下藤吉郎

豊臣秀吉がまだ木下藤吉郎といつて、織田信長の草履取をして居た時の事である。信長は、よく、夜明前から、馬場へ出て馬を乗りならした。毎朝玄關へ出て、

「誰か居るか。」

と呼ぶと、いつも藤吉郎が真先に出て来た。或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、  
「誰か居るか。」

と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て来た。

「そち一人か。」

「はい。」

「いつもより早いのに、よく参つて居つた。」

「いつも、人より一時前に参つて居ります。」

「一時も前に。」

と言つて、信長は驚いた。一時は今の二時



く、夜明前から、馬場へ出て馬を乗りならした。

毎朝玄関(げんかん)へ出て、

「誰か居るか。」

と呼ぶと、いつも藤吉郎が眞先に出て來た。

或大雪の朝、信長はいつもより早く起きて、

「誰か居るか。」

と呼ぶと、やはり藤吉郎が出て來た。

「そち一人か。」

「はい。」

「いつもより早いのに、よく

参つて居つた。」

「いつも、人より一時(どき)前

に参つて居ります。」

「一時(どき)も前に。」

と言つて、信長は驚い

た。一時(どき)は今の二時

間に當るのである。

「寒からうが。」

「少しも寒くはございません。」

「寒くはない。」

「はい。これが御奉公（ほうこう）だと思ひますれば、少しも寒くはございません。」

信長は軽くうなづいたが、其の後間もなく、藤吉郎を草履取から引上げて役人の數に入れた。

これがそもそも、藤吉郎出世のいとぐちである。

#### 自修材料（四）

##### ○二宮尊徳（つとむき）

小田原（をだはら）の殿様の家來（けらい）に服部（はつとり）といふ士（さむらひ）があつた。借金が山

ほどあつて、どうにもならなくなつたので、尊徳の所へ、整理（せいり）

に當つてくれるようにと頼んで來た。

尊徳はことわつたが、再三の招きに、よんどころなく、家業を

捨(す)てて、服部家へはいった。

分  
尊徳は先づ、主人の決心のほどをたしかめた。主人は、「自

の力に及ばないからこそお願いしたのである。何もかも

指圖(さしづ)通りにする。」と約した。「では、これから五年の間、食事は

飯(めし)と汁(しる)だけ、着物は木綿物(もめんもの)に限り、無用の事は一切してはな

らぬと、比の三箇候を守つて下さい上と言ふとIそれくらゐの

事は何でもない。」と言って、守ることを約束した。

さ  
今度は、夫人に此の三箇条を申し渡した。夫人も「主人で

へ守られるのですから、私は勿論(もちろん)の事です。」と言った。

(新漢字 輕)

(056. jpg)

次には家來・召使一同を呼出した。「諸君は、主人のお家がどんな難儀(なんぎ)なことになつて居るか、よく承知して居るはずだ。

どうしたら、これを元(もと)に返すことが出来るかよいちえ

があ

ん。つたら言つてくれ。」と言ふと、一同「何もよい考はありません。

た。どうか、先生の御教を伺(うかが)ひたいものです。」と言つた。そこで

す 尊徳は、「御主人は、これから五年間、此のつまりらぬ尊徳の申

の 通りにすると仰せられた。 ついては、もし諸君の中に、私

申す事に反対の人があつたら、さつそく暇を取つてもらひ

んな たい。」かういふと、一同「主家がこんな事になつたのは、み

私どもの罪です。 主家再興の爲には、どんな事でもいやと

は申しません。」と答へた。

いさん)し、主人の身分として、 尊徳は、次に一箇年の間の収入(しゅうにゆう)を計算(け

さうして、 見えを飾(かざ)らない、ぎりぎりの生活限度を定めた。

つた。 残つた金で、五年間に十分借金が返される見込(こみ)が立

るといふことは 豫算(よさん)は立派(りっぱ)に出来ても、豫算通りに實行す

容易（ようい）に出来ることではない。其のため、尊徳は、家人に非常

な決心をさせたのである。けれども、尊徳の立てた生活限度といふのは、決して無理なものではなかつた。だらけた心を引きしめると、かへつて其の方が氣持がよいくらゐになつた。家人は尊徳のえらさがわかつて、よく其の命に従つた。尊徳は、一人で、下男ともなり、會計掛（がかり）ともなり、書記と

もなり、家庭教師（かていきようし）ともなつて、夜晝心をくだいた。

其のかひがあつて、五年の後には、大きな借金を返した上に、なほ澤山（たくさん）の金が餘つた。主人はこれをお禮（れい）として尊徳に

贈（おく）つたが、尊徳は、よく自分の指事圖を聞いてくれたからこそ

残つた金であると言つて、家來や召使等にそつくり分けてやつて、自分は體一つを土産（みやげ）に、家へ歸つた。

## 第二十 雪の夜

(057. jpg)

おとうさんは、火鉢（ひばち）にあたりながら、新聞を讀んで居られる。おかあさんは、寢（ね）て居る赤んぼうのそばで、着物を縫（ぬ）って居られる。

誰もだまつて居るので、聞えるものは、かちかち

といふ時計の音と、鐵瓶（びん）のしゅんしゅんといふ音だけである。

しばらくすると、おとうさんが、新聞を置いて、

「静かな晩だなあ。」

と言はれる。おかあさんが、

「さうですねえ。」

と言はれる。

ほんとうに静かな晩である。外は、もう、人通り

が無いと見えて、ひっそりとして居る。

「今夜は、大分積るかも知れないぞ。」

とおとうさんが言はれた。夕方から雪が降出

して居るのである。

「あしたは、雪合戦が出来るでせうか。」

と、私が言ふと、おとうさんが、

「大丈夫出来る。 さつきのような調子で降續

くと、朝までには、ずいぶん積るよ。けれども、

(新漢字 聞 靜 積 調)

(058. jpg 挿絵あり)

春雄、あんまり積つたら困るだらう、學校へ行くのに。」

「いゝえ、大丈夫です。どんなに積つても、僕は

平氣です。」

「春雄は元氣だからね。」

と、おかあさんが笑はれた。

「おとうさん、もうどのくらゐ積つたでせう。」

「さあ、二階へ上つて、見て来るかな。 どうだ、春

雄。」

と言ひながら、おとうさんが立上られた。 私も

立上った。

部屋（へや）を出ると、急に寒い。

二階へ上って、ガラス戸かち外を見ると、全體が

何だか、ぼんやりと明かるい氣がする。 さうし

て、屋根も、木も、道も、

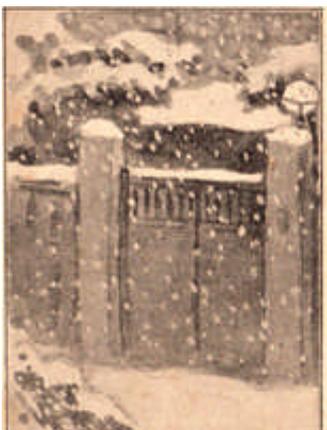
皆眞白になつて居

る。 窓（まど）の前の電燈

線が、白い、太いひも

のようになつて居

る。



(059. j p g)

もう十糎（センチメートル）も積つたらうか。 雪は、まだひつきり

なしに降續いて居る。

向かふの門燈の光の前だけ、降る雪が、黒く流れ

るように見えるのもおもしろい。

## 第二十一 心と心

軒(のき)下に腹(はら)ばへる黒き犬、  
にくらしき黒と思へば、

黒もまた、意地悪き人と見るらん、

齒をむきて、「うゝ」とうなりて、

垣(かき)を出て行く。

えんがはにうづくまる三毛の猫(ねこ)、

愛らしき三毛と思へば、

三毛もまた、したはしき人と見るらん、

尾を立てて、のどを鳴らして、

我にすり寄る。

## 第二十二 人を招く手紙

(一)

(060. jpg)

来る十六日は私の誕生日(たんじょうび)で、ちようど

日曜日ですから、母が私に、「お誕生日をお

呼びなさい、何か御ちそうをして上げよう。」と申します。 お呼びするのは、大てい近所の人で、あなたの知つていらつしやる方ばかりです。 もし天氣がよかつたら三郎(さぶろう)さんを連れて、お晝前にいらつしやい。 おもしろい事をして遊びませう。

月 日 春子

松子様

(二)

来る二十五日に、亡母の三回忌(き)の法事を致します。 まことに御苦労様ですが、どうか同日午前十時頃までに、お出でを願ひたうございます。

月 日 廣川連太郎

小山陽吉様

(新漢字 達 亡)

父が今年八十八になりましたので来る二十五日に、お心やすい方にお出でを願つてほんの心ばかりの祝を致したいと存じます。同日午前十時までどうぞ御來車を願ひます。又まことに申しかねますが、當日、祝の歌を一首いたゞきたうございます。これは年よりからのお願いでございます。

月 日 野田 國雄

原勝五郎様

### 第二十三 修學旅行日記

六月二十日

今日から修學旅行だと思ふと、何だか嬉(うれ)しくて、早くから目がさめてしまった。で、四時に起きて、支度をして學校へ行く。みんなが揃つて學

校を出たのは五時二十分、それから驛（えき）へ行くと、間もなく汽車が来た。川野先生始め、一同同じ

（新漢字 首 修）

(062. jpg)

所に乗ることが出来た。六時發車。

廣い野原、コーヒー園、いろいろの景色が次から次と、現れては又消えて行く。始めての長い汽車旅行なので、何もかも皆珍しい。

夕方、サン、パウロに着、日本人のホテルにとまる。

六月二十一日

朝のカフェーがすむと、一同、ホテルの前に整列（せいれつ）し、徒歩で州攻廳（せいちよう）の前に行く。ここで、先生から次のようをお話があった。

「皆さんは、ジヨゼ、デ、アンシエータといふ坊（ぼう）さん

を知つて居ますか。此の人の事については、

後に又くはしくお話するつもりですが、此の

人は、ブラジルの土人の爲（ため）に、始めて學校を建てた人です。其の學校が出来上つたのは、紀元千五百五十四年の一月二十五日の事でした。

だが、此の政廳は、其の學校の跡（あと）なのです。勿論（もちろん）建物は、昔のまゝではありません。此の學校の創立（そうりつ）記念日は一月二十五日でしたが、それが今日では、サンパウロ市の創設記念日になつて居ます。

(063. j p g 挿絵あり)

それから、キンゼ、デ、ノヴェンブロといふ通や、チレイタといふ通など、非常ににぎやかな処を通つて、アニヤンガバウーといふ公園へ

出た。此の公園は、少し低くなつて居て、其の上には  
ヴィアツット、デ、シヤーと



いふ長い陸橋がかゝつて

居る。其の上を電車や人

が通つて居る。サンパウロに居る日本人たち

は、c h aといふ言葉から、これを日本風に「お茶の水

橋」と呼んで居るさうである。

ホテルへ歸つて晝食し、午後は新聞社へ見學に

行く。活字を拾つて組んで居る所、其の組んだ

活字を大きな機械にかけて紙に刷(す)つて居る所、

又其の刷つたものを取揃へて荷造して居る所

など、いろいろの所を見せてもらった。毎日た

だ何とをく見て居た新聞も、かうして其の出來

る所を見ると、一枚(まい)の新聞紙も、なかなか粗末に

(新漢字 橋 食 紙)

(064. j p g 挿絵あり)

は出來ないものだと思つ

た。

夕方ホテルへ歸つて、先生から分けていただいた繪葉書に今日の事を書いて、おとうさんに出す。

六月二十二日

今日は、電車で、先づイビラ  
ンガの博物館へ行つた。

博物館は小高いをかの上

にあり、ブラジルの地理・歴史に関する繪畫や模

型（もけい）、又動鑛（こう）物の標（ひよう）本など、いろいろ  
な物が陳列

してある。

博物館を出て、

獨立記念像の

前で、先生に記

念の寫眞をと

つていたゞい

た。前に學校で習つたドン、ペドロの「独立か、死



か。「は、こゝで叫ばれたものだといふが、其の時代

(新漢字 繪)

(065. jpg)

にあつた建物が、今も一軒(けん)、當時のまゝで残つて

居る。

午後は、醫科(いか)大學とブタンタンの毒蛇(どくじや)研究所へ

行く。大學はずいぶん大きなもので、本や模型

が澤山あつた。日本人の學生も居た。 毒蛇研

究所では、先生が毒蛇について、いろいろくはし

い説明(せつめい)をして下さつた。 若し毒蛇にかまれた

ら、すぐ注射をすれば、よいさうである。 其の注

射の薬も、こゝで作つて居るといふ。

六月二十三日

早朝ホテルを立つて、サントス行の汽車に乗る。

空は明方から曇(くも)つて居たが、やがて山にかゝる

と、にはかに霧(きり)が起つて來て、あたりが薄(うす)暗く  
な

つてしまった。しかし、汽車が幾つかのトンネルをくぐり抜けて、山を下り、バナ、畠（はたけ）の多いサントスの平原へ出ると、そこはもうきれいに晴れて居た。ふりかへると、今下りて来た汽車の道がはつきりと見える。此の山は非常にけはしく、普通（ふつう）では、とても汽車が登れまいから、鐵の鋼（つな）で引張り上げるようにしてあるのである。

（新漢字 若 射 藥 朝 原）

（066. j p g 挿絵あり）

サントス驛から港へ出る

と、日の丸の旗をかゝげた

日本の汽船が居た。 さう

して、白い服を着た船員が、

僕たちを迎へてくれ、此の

人の案内で、船内を見せて

もらった。 船室も、食堂も、



一等は實に立派なものである。

船を下り、又町へ出て、電車

に乗る。しばらく行くと、海が見えて、大勢の人が海水浴（よく）をして居た。

電車は海岸に沿うて走つて行つたが、やがて、サ

ン・ヴィセンテといふ所に來た。こゝは四百年

餘り前、ポルトガル人が、始めてサンパウロ州へ

はいつて來た時の上陸地である。其の時彼等

が汲（く）んで飲んだといふ泉（いづみ）の清水（しみづ）は、今もなほ昔

のまゝに湧（わき）出して居る。夕方近く、サントスの

ホテルに着いた。

六月二十四日

(067. jpg 挿絵あり)

朝、ケーブルカーでセラット山に登る。こゝか

ら見ると、サントスの全景は手に取るようだ。

「此のサントスは貿易

港で、サンパウロ州の

産物は、大部分こゝか

ら外國へ出されるの

です。それから、あな

た方のおとうさんや

おかあさんも、日本か

ら來られた時には、大

ていこゝから上陸されたのです。」

先生がかうおつしやると、野田君が突然、

「先生、僕だつて、こゝから上陸したのですよ。」

と言つたので、みんながどつと笑つた。

## 自修材料 (五)

### ○二宮尊徳(つゞき)

今度は殿様から、其の領内(りょうない)の荒れはてた農村(のうそん)開發に骨を折

つてくれとの頼(たの)みを受けた。尊徳は又ことわりき



れずに、

これを引受けた。

或時、其の村の山野を開いて田にするために、多くの人夫を集めた。さうして、日々工事を見廻り、よく精を出す者には

(新漢字 貿易突然)

(068. jpg)

ほうびを與へて一同をはげました。

或日、一人の若者が殊に人々に立ちまさつて働いて居るのが見受けられた。下役どもは、此の者がおほめを受けるに違(ちが)ひないと思つたが、尊徳はだまつて歸つてしまつた。

次の日、此の若者が、又尊徳の目をひいた。若者は「えい、えい。」

と聲を出して、一生懸命で鋤をふるつて居た。其の足下には、見る見る新しい土が廣がつて行つた。

ところが、尊徳は一語も發せず、又そこを立去りもしなかつた。やがて若者のひたひからは汗(あせ)が瀧(たき)のように流れ、息づ

かひは荒くなつて、今にもたふれさうになつた。尊徳はそれを見て、「此の横着（おうちやく）者。」と叱（しか）つた。若者は其の威（い）に恐れて、へたりと地にすわつてしまつた。

其の日ほうびをいたゞいたのは、意外にも、年とつた人夫であつた。此の老人は、いつも木の根ばかり掘（ほ）つて居た。木

の根掘は、骨が折れる割（わり）に、仕事のあとが目だたない。それ

で、誰もかういふ仕事は好（この）まないが、根掘が進むないと、開拓（かいたく）

煙 は進行しないのである。老人は、其の根掘を引受け、人が

草（たばこ）をのみ、むだ話をして居る間も、こつこと仕事の手を休

めなかつた。其のおかげで開拓も進行するのであつた。

尊徳はこれこそ勤勞（きんろう）第一だと言つて、澤山のほうびを與へ

た。

尊徳は、幼い時から、自分で鍬をとつて働いただけあつて、一見して、人の働の裏と表がわかつたのである。

かうして、農村開発も十數年で目的を達することが出來た。

.....

金 日本の子供は、小學校に行始めると、きつと先生から「二宮

次郎さんをお手本になさい。」と言つて教へられる。金次郎、

大きくなつて尊徳と名のり、今は報徳(ほうとく)二宮神社に、

神として

まつられて居る。

(069. jpg)

### 漢字表

(新出)

制帶數式備加遂至衆當永久致

現由博愛陽王興祈更示歴史忠

低殊理續裏往復義必郷粗素妻

念侯報精功官職禮(礼)層湖設法難

點在順延凡成應利瑞便郎属豊

損婦農勞務失過臺附求盡危檢

有單驗良類適缺希關試敗研究

例採接館調產語努轉貧族圖際  
系伯展量達團經完責害盆要種  
貴速期群營他由和輕靜積修藥  
貿易然

（讀替）

旗定無記表山野黃金形元合合赤白得色圓家興  
南建暗示仰情現重品晝幼守途親末役女男殘每  
致願曾帶岩石連湖過散終數晝着費米設備從文  
開初口數盛注相作休得乘廣場働久朝荒波族邊  
帆明以必防運當夫尾破附退危家再晝店頭千切  
白使改用望失徒好集許直起比的困故成移渡數  
多樂足語新任例力限存蟲痛實寄際屋何馬惡歌

(070.jpg)

代路聞調達亡首橋食紙繪若射早原突

(假名附)

徽(キ) 章(シヨウ) 彩(サイ) 菱(ヒシ) 形(かた) 藍(あ  
る) 秩(チツ) 序(ジヨ) 箇(カ) 星(ほし) 染(そめ) 繁  
(ハン) 茂(モ)

聯(レン) 邦(ホウ) 斜(な、め) 筋(すぢ) 縦(たて) 平  
(ひよう) 紋(モン) 統(トウ) 支(シ) 那(ナ) 隅(グウ)  
肩(かた) 紅(くれなる)

純(ジュン) 益(ますます) 榮(さかえ) 潔(ケツ) 誠(まこと)

想(ソウ) 峯(みね) 湧(わく) 崑(はたけ) 壽(ジュ) 姫  
(ひめ) 源(みなもと) 頼(より) 朝(とも) 鶴(つる) 岡(を

か) 幡(マン) 舞(まひ) 奉(ホウ) 納(ノウ) 翌(ヨク) 唐  
(から) 會(ソ) 義(よし) 塚(つか) 光(みつ) 盛(もり) 肌

(はだ) 覺(おぼえ) 鎌(かま) 倉(くら) 陰(かげ) 日向(ひ  
なた) 眺(ながめ) 下(しも) 押(おす) 格子(コウシ)

澤(タク) 乃(ノ) 臆(オク) 藩(ハン) 江(エ) 薄(うす)  
秤(キロメートル) 輪(わ) 泉(セン) 岳(ガク) 寺(ジ) 墓

(はか) 詣(ケイ)

暖(あたゝか) 井(ゐ) 端(はた) 冷(レイ) 浴(あびる) 阪

(さか) 槍(やり) 長刀(ながなた) 魂(たましひ) 育(そだつ)  
誠(セイ) 艦(カン)

穂(ほ) 某(ボウ) 尉(イ) 惜(をしむ) 戀(こひ) 目(ボク)

恥(はぢ) 叱(しかる) 覧(ラン) 島(トウ) 威(イ) 衛(エ  
イ) 攻(コウ) 撃(ゲキ) 格(カク) 爲(ため) 捨(すて) 察

(サツ) 握(にぎる) 總(すべて) 河(カ) 峽(キョウ) 伏(フ  
ク) 掘(ほる) 割(わる) 掛(かける)

瀧(たき) 込(こむ) 段(ダン) 米(メートル) 哩(マイル) 億

(オク) 絶(ゼツ) 健(ケン) 康(コウ) 鈴(レイ) 薯(シヨ)  
謹(キン) 爾(ジ)

拓(タク) 僅(わづか) 訪(たづねる) 角(カク) 洲(ス) 乃

(ナイ) 至(シ) 範(ハン) 圍(イ) 譽(ヨ) 軒(のき) 倉(ソ)

ウ 庫(コ)

袋(ふくろ) 値(ね) 凶(キョウ) 逸(イツ) 停(テイ) 陰(イン)  
ン) 德(トク) 懸(ケン) 靴(くつ) 幣(ヘイ) 振(ふる) 胞  
(ホウ)

腹(はら) 推(スイ) 瀬(セ) 佐(サ) 砲(つつ) 彈(ダン)  
丸(ガン) 杉(すぎ) 忽(たちまち) 博多(はかた) 垣(かき)  
釣(つり)

河野(こうの) 通(みち) 屈(クツ) 絶(たえる) 忽 龜(かめ)  
姓(シヨウ) 兵(ヒョウ) 糧(ロウ) 救(すくひ) 狂(くるひ)  
早速(サツソク)

度(タク) 磯(いそ) 漕(こぐ) 吞(のむ) 収(シユウ) 容(ヨ  
ウ) 看(カン) 護(ゴ) 厚(あつい) 謝(シヤ) 名殘(なごり)  
爲(イ)

肖(シヨウ) 到(いたる) 處(ところ) 飾(かざる) 外(ゲ)  
宇(ウ) 苑(エン) 鈴(すず) 棟(むね) 金(かな) 具(グ)  
神々(かうがうし)

土産(みやげ) 細(サイ) 工(ク) 街(ガイ) 照(シヨウ) 炭  
(タン) 没(ボツ) 机(つくゑ) 團扇(うちわ) 異(イ) 豫  
(ヨ)

綿(メン) 密(ミツ) 専(もっぱら) 歿(ボツ) 畜(チク) 才  
(サイ) 井(シヨウ) 爐(ロ) 腕(うで) 筋(キン) 豊(トヨ)  
田舎(いなか)

掛(かかり) 怪(あやし) 派(ハ) 拂(はらふ) 堅(かたい) 織  
(シヨク) 懸(ケン) 暇(ひま) 織(おる) 扱(あつかふ) 堪  
(たへる) 熱(ネツ) 何

時(いつ) 寝(ねる) 鶏(にはとり) 棉(メン) 花(カ) 蔬  
 (ソ) 菜(サイ) 柑(カン) 橘(キツ) 認(みとめる) 誤(あや  
 まり) 露(ロ) 龍(リュウ)氏(シ) 率(ひきゐ) 笠(かさ) 留  
 (リュウ) 平(ひら) 創(ソウ) 犧(ギ) 牲(セイ) 艱(カン)  
 大人(おとな) 周(シュウ) 交(コウ) 涉(シヨウ) 蠅(はへ)  
 蚊(か) 蚤(のみ) 蜜(ミツ) 蜂(はち) 蠶(かひこ) 違(ちが  
 ふ) 甚(はなはだ) 栗(あは) 殖(シヨク) 驅(ク) 除(チヨ)  
 思(シ) 議(ギ) 飼(シ) 效(コウ) 綿(わた) 尺(シヤク)  
 莖(くき) 枯(からす) 藥(ヤク) 劑(ザイ) 蟻(あり) 複(フ  
 ク) 雜(ザツ)

巢(す) 型(かた) 塔(とう) 甘蔗(さとうきび) 稻(いね) 禾  
 (カ) 科(カ) 普(フ) 壞(カイ) 穀(コク) 舉(あげる) 楠  
 (くす) 成(しげ) 賊(ゾク) 絶(たやす) 汲(くむ) 討(うつ)  
 幅(はば) 燃(もえる) 傷(シヨウ) 藤(トウ) 豊臣(とよと  
 み) 秀(ひで) 吉(よし)

織田(おだ) 信(のぶ) 草(ソウ) 履(リ) 玄(ゲン) 鉢(は  
 ち) 縫(ぬふ) 瓶(ビン) 階(カイ) 部屋(へや) 窓(まど)  
 糰(セン)チメートル 齒(は) 誕(タン) 忌(キ) 嬉(うれし)  
 揃(そろふ) 驛(エキ) 整(セイ) 廳(チョウ) 坊(ボウ) 跡  
 (あと) 勿(モチ)論(ロン) 刷(する) 枚(マイ) 模(モ) 型  
 (ケイ) 鑛(コウ) 標(ヒョウ) 軒(ケン) 醫(イ) 蛇(ジャ)  
 説(セツ) 曇(くもる) 霧(きり)

綱(つな) 浴(ヨク) 浴(そふ) 泉(いづみ) 清水(しみず)

昭和十二年五月二十六日印刷  
昭和十二年五月三十一日發行

著作楯所有 著作權 發行者

ブラジル日本人教育普及會

東京市谷區二長町一番地

凸版印刷株式會社

印刷者 井 上 源 之 丞

東京市下谷區二長町一番 地

印刷所 凸版印刷株式會社